

今号の
表紙作家

リタイア後の 旅の風景を油彩画に



矢澤利彦 (高13回)

●やざわ・としひこ

飯田市生まれ。青山学院大学経済学部卒。日産火災海上保険(株)(現損保ジャパン(株))、損害保険リサーチ(株)勤務。高校時代は美術部に所属。会社リタイア後に絵画制作を再開した。画家の関原泰生氏に師事。好きな画家はクロード・モネと飯田出身の菱田春草。これまでに銀座、池袋などで個展を8度開催。

——高校時代は美術班で活動されていたんですけどそうですね。

なにせ60年前、記憶が定かではないのですが、当時のアルバムをめくるとハイキングの写真が出てきました。飯田風越高校美術部との交流は覚えています(笑)。

たしか、「高校連合美術展」も開催していたと思うのですが、作品の記憶は全くないですね。今は「美術班」というのですか？
当時は「美術部」でした。

油彩を始めたのは大学時代です。就職して、絵からは遠ざかりました。17年前、会社をリタイアしてからですね、油彩に集中できるようになったのは。

——サラリーマンをやめられてから、再び絵筆を取られたとか。

ずっと転勤族でしたからね、仕事も忙しかったし、絵を描いている余裕もなかったんです。でも、還暦を過ぎた頃から、キャンパスに向かいたくなりました。やっぱり絵が好きだったんです。リタイア後は時間もありませんでしたし、毎年数回は海外旅行に行きましたから、旅の風景を油彩で残そうと思ったのです。イタリア、フランスを中心に、これまで60か国は訪れました。感動を覚えたのはベルギーの「マチュピチュ」。また、エジプトの巨大な遺跡と歴史には圧倒されました。アンコールワット(カンボジア)やモロッコ

コの風景や風俗も思い出に残っています。必ずスケッチブックと水彩絵の具を持って行き、現地では水彩で描いてきます。帰国してから、油彩画に取り組むのです。大学OB、会社OBなどの絵を描く仲間の展示会の機会もありましたから、それに出席もしました。

——いちばん印象に残っている旅は？

2005年に行った「世界一周の船旅」ですね。スエズ運河とパナマ運河を通過したときは、感動を覚えました。当時はまだ紛争のなかつたリビアなど約20か国に上陸し、現地では家庭訪問をしたり、船内ではスケッチのグループを作ったり、船内でもしたり、楽しかったなあ。船酔いも経験しましたが、船上では毎日運動する機会もあって、10kgスリムになって帰還したんですよ。3か月を超える長い船旅でしたが、二度と経験できない貴重な体験となりました。帰国後は、「世界一周水彩画集」を作成しました。

海外の長旅も億劫になりつつあります。そこへきて、今度のコロナ禍もありますから、取材の旅は当分休憩です。今後は国内を描くことが主流になりそうですね。飯田周辺の風景も描きたいですね。

——ありがたうございます。次回のお展を楽しみにしております。